

実行委員長挨拶） ジャパニーズウイスキー制定の日に向けて

ジャパニーズウイスキーは今、世界でもっとも注目される酒のひとつとなっています。海外の酒類コンペでは高い評価を受け、オークションでは毎回その記録を塗り替え続けています。先ごろ発表された国税庁の輸出統計（2020年）では、ついに清酒を抜いてウイスキーが第1位に躍り出ました。その金額は約271億円。これは同じ蒸留酒である焼酎の、実に25倍の数字です。

さらに世界的なウイスキーブーム、クラフトウイスキー人気もあって、ここ4～5年、日本全国に新しいクラフト蒸留所が相ついで誕生しています。その数は計画段階のものも含めると、35近くにもなります。大手3～4社の寡占状態が長く続いた日本のウイスキー業界に、今新しい時代が到来しています。

そうしたジャパニーズウイスキーの新時代を確実のものとし、ジャパニーズウイスキーの認知をさらに広めるためにも、私たちはこの度、「ジャパニーズウイスキーの日」を制定し、その発展を後押ししたいと考えました。その日にイベントを開き、ジャパニーズウイスキーを応援する人たちと、乾杯をしたいと考えています。

では、ジャパニーズウイスキーの日と呼ぶにふさわしい日はいつなのでしょう。そもそも、日本の本格ウイスキー造りはいつから始まったのでしょうか。

日本にウイスキーが伝わったのは、1853年にペリーが浦賀にやってきた時だといわれています。いわゆる“黒船来航”で、この時、交渉にあたった幕府の与力や通訳に、ペリーの船上で、ウイスキーが振舞われました。その後、明治維新以降は外国産の安い醸造アルコールに色や香味を加えた、いわゆるイミテーションウイスキーの時代が長く続きました。

日本で本格ウイスキーを造ろうと考えたのは寿屋（現サントリー）の鳥井信治郎です。スコットランドでウイスキー造りを学んだ竹鶴政孝を初代工場長に迎え、1923年、山崎蒸留所を創業します。これが日本初の本格ウイスキー蒸留所で、その山崎の原酒を使った国産本格ウイスキーの第1号が、「サントリーウイスキー」、通称「白札」でした。その白札が発売されたのが、1929年4月1日のことです。

ジャパニーズウイスキーの日の候補としては、いくつかの選択肢がありました。ペリーが浦賀にやってきた1853年の7月8日、本格蒸留所第1号の山崎蒸留所の創業年、さらには、その山崎の初蒸留の日…。しかし、寿屋の白札の発売日以上にふさわしい日はないと判断し、この日を「ジャパニーズウイスキーの日」とすることに決めました。

今年はコロナ禍で、大きなイベントを開くことはできませんが、オンラインで全国のジャパニーズファンとつなぎ、1929年にあやかって、4月1日の19時29分に乾杯したいと思っています。そのための費用を捻出するために、クラウドファンディングを開始したいと考えています。

もちろん、このイベントは1回で終わるものではなく、これから毎年行われます。2023年には、いよいよ「ジャパニーズウイスキー生誕100年」を迎えます。その生誕祭も当実行委員会で行いたい、そのプラットフォームづくりも、この会が担っていければと考えています。

ぜひ、この会の主旨に賛同いただき、参加していただければと願っています。

2021年2月吉日 ジャパニーズウイスキーの日実行委員会

代表 土屋守

実行委員一同